

## 玉子の殻

水野 仙子

風呂敷には肉一斤と玉葱が包まって居る。それを抱へて私は歸つて來た。裏口からそつと風呂敷を持って出た時には、まだ薄明りが麥の穂を撫でゝ居たが、丘を下つて田圃を越して坂をのぼって、そろそろ氷水でもはじめやうといふやうな風に見える肉屋の庭に立つて、仔細らしい身振りをする主人の包丁の使ひ方を見て居るうちに、すっかりもう日は暮れてしまった。

家まで灯のある通りよりも黒い道の方が長い、陸軍糧秣本廠の硝子戸から洩れる灯がおしまひで、練兵場に巡視の灯がちらちらしているだけ、それだけあたりは暗い。

ちやりゝばったりばったりといふ雪駄の音が耳についた。それは練兵場の柵に添って、何處に續くのか知らないが兎に角それに添ふて行く道がある。私の歩いてる道は行くに従つて右へ右へと曲つて行く。向ふの道は徐ろに左の方へと延びて行くらしい。其間には畑があつて蠶豆や、植木屋の領分續きで檜の苗などが植はつて居る。さうしてそれを三角形に造つて兩方の道は岐れてゆく。私の進んで行く方は心持ち爪先上りになる。向ふの方は少々低い。

ちやりゝばったりばったりと引摺るやうな雪駄の音がする。今は道程が平行してるけれども、と思ふ間に大分もう低い方の向ふは先になった。私の道もいよいよ右へ行く。それからはもう全く方向は別になるのだ。

踵の金が時々小石に觸れてちやりゝと鳴る。それも段々かすかになつた。

印半纏を着て、思ふさま腰帶にぎゆつと兩手を挟んで、脊の高い男が外足に歩いて行くのらしい。なんだかそんな姿を道の岐れる練兵場の前で見たやうな氣がする。また想像がそんな氣をさせるのかも知れない。

私は田圃に差しかゝつて、丘の上の家のぼつちりとした灯影をみながら風呂敷包みを持ち替えた。

玉葱の香がふうんとほった。

卍

風流といふのだらう、蟲の喰ったやうな曲りくねった板に、茶事指南と細い字がかゝつて居た。その掛けてある小さな低い冠木門を挟んで枳殻の垣がある。其前に玉子の殻が人に踏み碎かれて散らかつて居た。私はそこを避けて通った。無意識にそんなことをしてからふと考へた。

私の國では玉子の殻を踏むと女はお産が重いと言つて居る。いつの昔からかそれが女の口から口へと傳へられて、猶此後とも女が絶えない以上は絶えないであらう。女といふものはお産をするものに決つてるのだらうか？ さうと見えて私も小ひさな小ひさな、髪の毛が長いから女だと男だと區別して居たやうな時代から、すでもうそんな觀念を持つてたらしい。

第一女の子は先天的に人形が好きである。お飯事をするにも家の赤んぼがなどゝ言つて居る。私達に限らず如何な時代の女の子でも、人形を喜んでそしてお飯事のむしろには、旦那さんやお父さんがなくとも子供は必とこしらへてある。姉の赤んぼや親戚の子供を大騒ぎしてあやしたり負ふしたりするのも女の子だ。男の子が赤んぼをおぶつてるのを見ると不調和な感じがする。根掘り葉掘りどんな難問でおつ母さんを困まらしても、女と赤兒に就ては大抵何の不審も起さないで過ぎる。不審を起すやうになつた頃はすでもう眞實の女なんだ。

尤もすべて一概にとは言はれないが、その頃までは道を歩いてゝも赤んぼや小さな子供によく目がとまる。可愛いか笑つてるとか言つて、時には知らぬ人の脊中にさへ惜しげもなく愛嬌を溢して行く。

其時代が過ぎたらもう駄目だ。女それ自身は何處やら容姿が整つて美しくなつて來るけれども、自分のことにばかりかまけてゝ、先天的の子供に對する注意は暫くお預けとなる。買物に行くのは厭、人中に出るのは恥かしい、それでゝ新しい着物が出來たら何處にか着

て出て見たい、お湯に行くのが厭で、胸のあたりに肉づいて來るのが悲しくて、それから肩あげを取られるのが心細くて、おつ母さんと口論いさかひをする。人の顔を見ては赤くなり、見られてはハツとし、紅くなつたと思へば思ふ程眞つ赤になつて身の置き所がなくなる。さうしてまた此時代には偷ぬすみ見みといふことをよくやる。此状態が一二年續いて來ると、一人の時はやはり小さくなつて固まつて居るが、二人になると無性に強くなつて、會つた人や見た人の缺點あちを探したり批評したりする。そうして私は女だといふやうな矜ほじりを持つて氣取つて歩く。

併しこんな時が一番面白いので、心配といふ心配もなく、泣くといつたつて眞實ほんとに泣くことが出来るから泣いた後あとはさっぱりする。自分で動く必要がなくて動かされてるのだからいゝ。女が女と生まれて悔くやまないのは此時代だけであらう。男に生まれゝばよかつたとは幾度言つても、それは要するに活々とした心で活々としたものを見ての羨望うらやみの聲であつたもの。

玉子の殻よを避けて通つて、私はふと自分で自分を憫あはれむやうな心の笑ひを覺えた。昔は無論氣を付けて玉子の殻よを避けて通つた。さうして過つてそれを踏んだ時など、さも取り返へしがつかないことでもしたやうな氣がして、後うしろを振りかへつて見たものだ。漠然ぼくぜんとした恐怖おそれ——それはしかし段々大きくなつて來るに従つて取れて來た。けれどもその代りには女が女といふものを知つた淺猿あさましさが残つた。

其夜私は私より二ツ年の若い友に玉子の殻こしらひの古諺こわざを聞いて見た。

信濃にある其友の地方では、産が重いとは言はないけれども、やはりそれは婦人の病氣のことに關くわんして言ひ傳へて居るといふ。

女といふものゝ話が出た。

女はつまらないと言つた。何故女に生れたらうと言つた。玉子の殻こしらひについてさへそんな里諺りげんを作られるやうな女の運命が情けないと言つた。

併しまだ男に言はせると女に生れゝばよかつたと皆が言ふけれども、一體どつちがいゝのだらうと言つて笑つた。

軽くなったネルの單衣ひとへの袖を捲まくって私は今日不思議なものを見つけた。左の二の腕に筆の軸で押したやうな白い斑痕はんこんがある。不思議でもなんでもない植疱瘡うゑほうそうの痕あとなんだけれど、私には何故か其時非常にもの珍らしく感じられた。

暫くそれを凝じっ乎と眺めて居て、私は久しぶりで故郷の父母を懐しく思った。

「水野仙子全集」第二卷より

初出：「婦人くらぶ」明治四十三年七月

テキスト入力：小林 徹

公開：平成二十九年五月十四日